

第2章 I 5 他教科等の分析と手立て

小学校 社会

【教科の理解度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	80.4	91.4	85.4	78.1	67.1	24.3
令和7年度・小5	83.5	94.3	87.5	82.5	70.1	24.2
令和6年度・小4	82.1	92.1	86.1	80.4	69.6	22.5
令和7年度・小6	86.8	95.5	90.0	85.3	77.0	18.5
令和6年度・小5	83.7	94.1	87.0	81.8	72.0	22.1
令和5年度・小4	81.2	91.3	85.8	78.7	68.9	22.4

【社会の授業で、いま、世の中で起こっていることについて、資料をもとにして考えることがある。】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	51.0	53.0	51.7	50.6	49.1	3.9
令和7年度・小5	57.5	64.3	60.1	56.9	48.8	15.5
令和6年度・小4	52.2	55.4	52.7	50.7	50.2	5.2
令和7年度・小6	74.9	81.6	79.1	74.1	65.2	16.4
令和6年度・小5	62.0	69.3	63.8	60.5	54.6	14.7
令和5年度・小4	54.8	55.9	55.6	54.6	53.1	2.8

【分析結果】

理解度における肯定的な回答割合は8割を超えています。経年変化で見ても学年が上がるにつれて、ポイントも上がっています。一方でC-D層の差が10ポイント前後となっており、A-D層の差も20ポイント前後の差があります。

「社会の授業で、いま、世の中で起こっていることについて、資料をもとにして考えることがある。」では、肯定的な回答割合が学年が上がるにつれて上昇しています。学習内容や発達の段階に応じて、社会的事象と世の中で起こっていることを関連付けながら考える授業の工夫をすることが大切になります。

【授業づくりのアイデア例】

社会科では社会的事象の見方・考え方を働かせ、学習の問題を追究・解決する活動を通して、資質・能力を育成することが求められます。資料提示を工夫して、生活の中の「当たり前」のことに問題意識をもち、「なぜ?」「知りたい!」と感じる学習問題を設定し、予想や学習計画を立てながら解決の見通しをもつなど、児童が主体的に学習することができるような単元の導入の工夫が大切です。また、追究の過程でわかってきたことを白地図や図表などに表し、それらを使って説明や表現をしたり、わかったことと、今、世の中で起きていることや課題を関連付けながら、「自分たちにできることは何か」と社会への関わり方を選択・判断したりするなど、単元を通した問題解決的な学習の充実を図ることが重要となります。

小学校 理科

【教科の理解度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	89.8	95.8	93.8	88.4	81.5	14.3
令和7年度・小5	90.9	96.1	93.0	90.0	84.5	11.6
令和6年度・小4	90.0	95.6	92.7	89.6	82.4	13.2
令和7年度・小6	86.5	93.5	88.7	84.7	79.5	14.0
令和6年度・小5	90.8	96.2	92.7	89.3	85.1	11.1
令和5年度・小4	90.4	96.2	92.5	90.0	82.8	13.4

【理科の授業で、実験や調査に取り組む前に、仮説を立て結果を予想している。】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	88.2	95.1	92.8	88.1	76.9	18.2
令和7年度・小5	91.3	97.3	94.4	90.8	82.7	14.6
令和6年度・小4	87.5	95.9	91.0	86.5	76.3	19.6
令和7年度・小6	89.6	96.2	93.2	90.4	79.0	17.2
令和6年度・小5	91.4	97.1	94.1	92.0	82.7	14.4
令和5年度・小4	89.5	96.1	93.3	88.9	79.7	16.4

【分析結果】

理解度における肯定的な回答割合は高い水準ですが、同一母集団の経年変化に着目すると、小4から小5で増加が、小5から小6で減少が見られます。この変化はD層でより大きいことからA-D層の差は小4から小5で縮小するものの小5から小6で拡大します。

同じ傾向が「理科の授業で、実験や調査に取り組む前に、仮説を立て結果を予想している」の設問においても見られます。小4で重視する「根拠のある予想や仮説を発想すること」を意識した授業が行われていることが考えられ、問題解決の過程を通して学ぶことと理解度の相関が高いことが考えられます。

【授業づくりのアイデア例】

理科では、問題解決の過程を通して資質・能力を育む授業づくりをすることが大切です。その際、小3では「問題の見だし」、小4では「予想や仮説」、小5では「解決の方法の発想」、小6では「より妥当な考えをつくりだすこと」など、学年ごとに主に育みたい問題解決の力がありますが、他の学年で掲げているものにも配慮して指導する必要があります。例えば、小5において予想や仮説を基に解決の方法を発想することや、小6において予想や仮説と実験や観察の結果とを比較して考察することなどです。また、D層の児童も含め全ての児童が根拠のある予想や仮説が発想できるよう、関連する既習内容を掲示したり、イメージ図などに表すことを伝えたりして、指導の工夫をすることが大切になります。

小学校 音楽

【教科の理解度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	86.7	91.6	90.3	85.6	79.5	12.1
令和7年度・小5	86.7	90.4	88.8	87.5	80.1	10.3
令和6年度・小4	86.3	90.8	87.7	87.3	79.3	11.5
令和7年度・小6	84.0	87.4	86.0	83.9	79.0	8.4
令和6年度・小5	86.9	91.5	88.3	86.7	81.2	10.3
令和5年度・小4	86.9	91.4	88.3	86.9	80.9	10.5

【教科の好感度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	80.9	84.2	83.8	79.3	76.2	8.0
令和7年度・小5	77.9	80.3	78.9	79.4	73.1	7.2
令和6年度・小4	79.8	83.4	80.2	81.0	74.7	8.7
令和7年度・小6	74.5	76.7	76.3	74.9	70.7	6.0
令和6年度・小5	78.0	80.2	79.3	78.6	74.1	6.1
令和5年度・小4	80.3	82.7	81.3	80.1	76.8	5.9

【分析結果】

理解度では、肯定的な回答は、全学年で8割を超えています。どの学年もA層からC層に大きな差は見られませんが、C層とD層の間に差が拡大していることがわかります。また、同一母集団の経年変化に着目すると、小6において、すべての層で理解度が減少しています。

好感度では、全学年で7割以上の児童が肯定的な回答をしており、どの学年においてもA-D層の差が10ポイント以下であることがわかります。学習の得意不得意に関わらず、全ての児童が音楽活動の楽しさを体験することを通して学びを進める教科の特徴が表れています。

【授業づくりのアイデア例】

音楽科において、児童が育成を目指す資質・能力を身に付けるためには、多様な活動を通して音楽活動の楽しさを体験することが大切です。その際、音や言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることは、表現及び鑑賞を深めていく際に重要であり、理解度の向上につながります。特に言葉で自分の考えを伝えることに困難さを抱える児童に向け、身体を使った活動を取り入れたり、言葉と音楽を結び付ける活動を積極的に取り入れたりするなど、児童が教材となる音や音楽から感じ取ったことや聴き取ったことを表出できる手段を増やすことが有効です。

小学校 図画工作

【教科の理解度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	91.9	93.8	93.7	91.8	88.2	5.6
令和7年度・小5	92.6	93.9	93.4	93.3	89.9	4.0
令和6年度・小4	92.2	93.3	93.2	92.6	89.7	3.6
令和7年度・小6	92.4	91.9	92.9	93.1	91.6	0.3
令和6年度・小5	93.6	94.9	94.4	93.6	91.5	3.4
令和5年度・小4	92.9	94.4	93.7	93.1	90.5	3.9

【教科の好感度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	88.2	88.6	89.3	88.1	86.8	1.8
令和7年度・小5	87.6	86.1	87.4	88.1	88.8	-2.7
令和6年度・小4	88.9	87.5	89.3	89.3	89.4	-1.9
令和7年度・小6	84.5	81.2	84.8	86.0	86.0	-4.8
令和6年度・小5	88.1	87.4	88.3	88.7	88.2	-0.8
令和5年度・小4	89.5	88.3	89.4	90.2	90.3	-2.0

【分析結果】

理解度は、全学年で90%を超えています。誰もがわかるよう、丁寧な授業づくりをしている結果だと考えられます。A-D層の差に着目すると、令和7年度の小4は約5ポイント、小5は約4ポイント、小6はほぼ同値であることから、学年が上がるにつれて差が小さくなっていく傾向が見られます。

好感度は、全学年で80%を超えています。A-D層の差に着目すると、令和7年度の小4を除いて、全ての学年でA層よりD層の方が高くなっています。

わかると回答していることを生かして、どの層の児童にとっても、表現したり鑑賞したりすることを自分事として捉えて学習できるようにするとともに、身に付けた資質・能力を生活や社会の中で生かすことができるようにしていくことが大切です。

【授業づくりのアイデア例】

図画工作では、作りだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養いながら、材料や用具を用いて工夫して表したり、自分なりの見方で鑑賞したりすることができるようにします。

例えば、自分事として捉えて学習できるようにするために、素材に触れて新たな発見をしてみたり、新しい表し方をやってみたりするなど、児童の「やってみたい」を引き出せるような工夫が考えられます。また、鑑賞やまとめをする時に、身に付けた資質・能力を生活や社会の中で生かせる場面について考えさせたり、日常生活で活用できている時に価値付けたりすることが考えられます。

小学校 体育

【教科の理解度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	93.2	93.9	94.2	94.0	91.1	2.8
令和7年度・小5	92.3	92.4	92.8	93.7	90.2	2.2
令和6年度・小4	93.5	94.6	93.7	94.4	91.5	3.1
令和7年度・小6	90.6	89.8	90.9	91.9	89.9	-0.1
令和6年度・小5	93.2	93.7	93.2	94.1	92.2	1.5
令和5年度・小4	93.7	94.5	94.2	94.2	91.8	2.7

【教科の好感度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	89.3	87.2	89.8	90.2	90.1	-2.9
令和7年度・小5	85.9	82.6	85.2	88.2	87.5	-4.9
令和6年度・小4	89.5	87.8	89.2	91.1	90.2	-0.7
令和7年度・小6	83.1	79.4	81.8	85.2	85.9	-6.5
令和6年度・小5	86.8	83.5	85.7	88.6	89.5	-6.0
令和5年度・小4	89.6	87.8	89.4	91.2	90.2	-2.4

【分析結果】

理解度の肯定的な回答割合は、全学年で9割を超えており、さらにA層-D層の差も小さいため、多くの児童が「わかる」を実感できる授業が展開されていると推測されます。

好感度の肯定的な回答割合は、全学年で8割を超えていますが、A層の数値が他の層よりも低く、C層の数値が他の層より高い結果となっています。

理解度、好感度ともに、学年が上がるにつれて数値の減少が見られます。「わかっているけれど、上手くできない」といった苦手意識をもっている児童への一層の配慮とともに、「上手くできないけれど、体育は楽しい」と実感できるような授業づくりが大切です。

【授業づくりのアイデア例】

体育科では、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指しています。授業では、各領域の特性に応じた楽しさをたっぷり味わうことができるよう単元をデザインします。誰もが安心して活動できる場や用具の工夫、みんなで(みんなが)楽しめるルールの工夫などを、児童やクラスの実態に応じて柔軟に行います。

運動やスポーツは「する」ことだけでなく「みる」「支える」「知る」など、多様な関わり方や楽しみ方があります。授業者は、技能面の価値付けに偏ることなく、友達の動きを見てアドバイスをする姿、頑張っている友達に声援を送る姿、チームの特徴を捉え作戦を提案する姿などを、積極的に価値付けることが大切です。

小学校 家庭

【教科の理解度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小6	87.9	90.5	90.0	89.0	82.4	8.1
令和6年度・小6	87.8	89.7	90.0	88.5	83.2	6.5
令和5年度・小6	87.2	89.7	89.2	87.9	81.9	7.8

【教科の好感度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小6	82.9	85.0	84.7	82.6	79.5	5.5
令和6年度・小6	83.0	82.7	85.0	83.6	80.9	1.8
令和5年度・小6	80.7	80.7	82.5	82.8	76.7	4.0

※小4・小5は調査無し

【分析結果】

理解度、好感度ともに8割以上の子どもたちが肯定的な回答をしており、日々の授業実践の成果が表れていると推測されます。4層分析でも、A層-C層は差異はあまりなく、D層が若干低くなっています。そのため、これまで学んだ既習と既習をつなぎ、問題解決をするとともにD層の子どもたちに充実感や達成感をもたせることが大切になります。また、少数ではありますが、わからない子は理解できないまま学習が進んでいることも考えられます。わからないことをそのままにしない手立てや授業内容の工夫を行っていく必要があります。

【授業づくりのアイデア例】

家庭科では、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築を目指しています。そのため、学習内容を生活や社会と関連付け、何のために学習するのか、どんな資質・能力を身に付けることができるかをあらかじめ示すことで、学習する必要感を高めることができます。

また、実践的・体験的な活動を通して習得した知識及び技能が、生活の自立につながるように活動を組み立てることが重要となっていきます。子ども同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたり、家族や身近な人々との会話を通して考えを明確にしたりすることにより、家庭分野で身に付けた力を家庭生活で生かすことにつながると考えられます。

小学校 外国語

【教科の好感度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小6	64.7	68.2	70.4	64.5	56.0	12.2
令和6年度・小6	63.9	67.4	69.2	63.4	55.9	11.5
令和5年度・小6	63.9	67.8	68.4	64.3	55.3	12.5

※小4・小5は調査無し

【新しく習ったことは、何度もくり返して練習している。】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	60.1	65.4	61.9	57.7	55.5	9.9
令和7年度・小5	55.6	65.9	57.5	51.9	47.2	18.7
令和6年度・小4	61.8	67.9	63.0	59.8	56.6	11.3
令和7年度・小6	53.2	66.4	57.0	48.0	41.7	24.7
令和6年度・小5	57.3	67.8	59.7	53.1	48.5	19.3
令和5年度・小4	62.7	68.4	63.3	61.6	57.6	10.8

【分析結果】

好感度は前年度より0.8ポイント上昇しました。4層分析では、A層からC層に大きな差は見られませんが、C層とD層の間に差が広がっています。楽しく授業に取り組む児童の中に、英語を好きになれずにいる児童が埋もれてしまう傾向があると考えられます。

「新しく習ったことを何度も繰り返して練習している。」については、学年が上がるにつれて数値が低下し、A-D層の差も大きくなっています。各単元の目標達成に向けて、既習の表現を聞いたり話したりする場面を意図的に設定し、繰り返し指導することが重要です。

【授業づくりのアイデア例】

各単元の目標を児童と共有し、児童一人一人がその達成に向けて何に取り組むべきかを明確にしたうえで、言語活動に取り組めるようにすることが重要です。

例えば、単元の終わりに「行きたい国の魅力をALTに発表する活動」を設定する場合、まずSmall Talkなどを通して児童にゴールの見通しをもたせます。そのうえで、必要な語彙や表現を身に付けられるよう、モデル動画を繰り返し視聴できるようにしたり、児童同士で発表し合い、互いにアドバイスをしながら改善を図ったり、ポイントを全体で共有したりするなどの工夫が考えられます。

目標に向けてやるべきことを明確にすることで、必要な力が身に付き、児童の達成感にもつながることが期待されます。

小学校 道徳

【学習意識調査から】【教科の好感度】
 <肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	72.9	74.3	74.7	73.6	69.2	5.1
令和7年度・小5	72.5	70.7	72.1	74.9	72.4	-1.7
令和6年度・小4	72.5	72.2	73.2	75.1	69.6	2.6
令和7年度・小6	72.3	68.8	72.8	74.8	72.7	-3.9
令和6年度・小5	74.3	71.3	74.6	76.9	74.1	-2.8
令和5年度・小4	72.7	71.4	72.6	74.2	72.4	-1.0

【対話力】<肯定的な回答割合と4層分析データから>
 私は、話し合いの時、考えや意見を進んで出している。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	68.7	76.0	70.9	67.3	60.7	15.3
令和7年度・小5	63.6	71.1	65.4	61.0	56.9	14.2
令和7年度・小6	59.9	70.0	63.0	56.4	50.7	19.3

【分析結果】

好感度では、70%以上が肯定的な回答をしており、A-D層に大きな差が見られないことから、学習の得意不得意に関わらず、全ての児童が同じ土台で話し合う教科の特徴が表れています。

同一母集団の経年変化では、令和7年度小6の回答がどの層も減少しています。高学年では内容項目が増え、自分事として考えることが難しいことが考えられます。

「話し合いの時、考えや意見を進んで出している。」については、学年が上がるにつれて数値が低下し、また、A-D層の差も大きくなっています。道徳科では、他者と話し合いながら、児童が多様な感じ方や考え方に接し、自己の生き方について考えを深めることが重要です。

【授業づくりのアイデア例】

道徳科では、児童一人一人が答えが一つではない道徳的課題を自分自身の問題として捉え向き合う「考え、議論する道徳」への質的転換が求められています。

全ての児童が同じ土台に立ち、活躍できる授業を作っていくために、挙手、ペア、グループ、書く活動、役割演技等を取り入れ、自分の考えを表出する工夫をすることが大切です。また、自分の考えをもったり、他者と共有したりできるよう、アンケート機能や心情曲線等、GIGA端末を活用して立ち位置を可視化することも工夫の一つです。自分事として考え、他者と話し合うことで考えを深めることが道徳科では大切な学習活動です。

小学校 特別活動

【学級活動の好感度】

＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	86.3	91.1	90.3	86.0	78.0	13.1
令和7年度・小5	86.9	90.7	89.1	86.3	81.5	9.2
令和6年度・小4	86.8	91.2	89.3	87.8	79.1	12.1
令和7年度・小6	86.6	89.6	88.6	86.2	82.4	7.2
令和6年度・小5	87.5	91.2	89.8	87.4	81.8	9.4
令和5年度・小4	86.9	91.3	89.5	87.8	79.2	12.1

【分析結果】

好感度では、85%を超える児童が肯定的な回答をしており、学年による大きな差はありませんでした。また、同一母集団の経年変化に着目すると、令和7年度の小5、小6は有意な変動は認められませんでした。一方、A-D層に着目すると、学年が上がるにつれて差が縮まっています。このことから、高学年になるほど、学習の得意不得意に関係なく、学級活動を通して一人一人が役割をもち、より主体的に学級や学校における生活づくりへ参画できていると捉えることができます。

【学級力】＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞
私は、自分たちの学習や生活をよりよくするための話し合いや活動に進んで取り組んでいる。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	72.7	77.2	74.3	72.9	66.7	10.5
令和7年度・小5	73.7	78.5	75.7	73.6	67.3	11.2
令和6年度・小4	74.7	78.5	76.0	75.5	68.8	9.7
令和7年度・小6	76.6	81.3	78.2	76.1	71.1	10.2
令和6年度・小5	76.1	79.7	77.4	75.6	71.8	7.9
令和5年度・小4	76.2	79.6	77.5	76.2	71.3	8.3

【分析結果】

令和7年度の結果を見ると、肯定的な回答は学年が上がるにつれて高くなる傾向が見られます。同一母集団の経年変化としては、小6は有意な変化は見られませんでした。

【授業づくりのアイデア例】

「なすことによって学ぶ」が方法原理の特別活動において、自発的、自治的な活動の充実が求められています。学級活動(1)の話し合い活動において、輪番制ですべての児童が司会グループを経験できるようにするなど、児童の社会参画意識の醸成につながるよう、一連の学習過程の繰り返しによる実践を積み重ねていくことが大切です。

小学校 生活・総合的な学習の時間

【教科の好感度】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	72.9	74.3	74.7	73.6	69.2	5.1
令和7年度・小5	72.5	70.7	72.1	74.9	72.4	-1.7
令和6年度・小4	79.7	82.6	81.7	80.5	73.9	8.7
令和7年度・小6	72.3	68.8	72.8	74.8	72.7	-3.9
令和6年度・小5	79.5	82.9	80.4	80.1	74.7	8.2
令和5年度・小4	80.9	84.2	82.6	80.6	76.3	7.9

【授業で習ったことを普段の生活と結び付けて考えている。】

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	65.4	70.3	68.4	63.9	59.0	11.3
令和7年度・小5	66.0	75.2	67.7	63.7	57.6	17.6
令和6年度・小4	65.1	69.7	66.9	65.0	58.7	11.0
令和7年度・小6	66.2	75.3	70.8	63.2	55.8	19.5
令和6年度・小5	68.2	75.5	69.8	67.6	60.3	15.2
令和5年度・小4	68.2	72.8	69.4	67.4	63.1	9.7

【分析結果】

どの学年においても肯定的な回答が7割以上となっています。一方で、経年変化を見ると、どの学年においても年々減少傾向にあることがわかります。

4層分析に着目すると、右側A-D層の差については、令和7年度の小5、小6の肯定的な回答は、A層よりもD層の方が上回る結果となりました。さらに、この表にはありませんが、中1～中3でも同様の結果が見られました。

【授業づくりのアイデア例】

総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、総合的・横断的な学習を行うことを通して、資質・能力を育成します。授業をつくる際には、まず取り扱う学習材が身近で具体性のあるもの、探究的な学習に発展する可能性のあるものであるか、しっかりと吟味します。さらに、どのように児童の探究が進むか、教師が単元の見通しをもつことで、どこでどんな体験活動を入れるか、外部講師はどうするかといった手立てが見えてきます。また、各教科等との関連を考えながら単元を構成することで、児童は各教科等で培った力を探究的な学習の中で活用し、汎用的な力として身に付けていきます。例えば、調べたことを数値化・グラフ化する(算数)、資料を読み取る(社会)、目的や相手に応じて伝え方を考える(国語)といったように、単元の進捗における児童の思考の流れに沿って、他教科等との関連を意識し、カリキュラム・マネジメントしていくことが大切です。

第2章 Ⅱ 中学校の全市結果と分析、手立て

第2章 II 1 各教科の結果概要

II 中学校の全市結果と分析、手立て

1 各教科の結果概要(国語・社会・数学・理科・英語) ※値は平均正答率(%)

○全体との比較(令和7年度の結果)

R7	5教科平均正答率		
	川崎	全体	差
中1	65.0	65.3	-0.3
中2	61.1	59.6	+1.5
中3	59.6	57.7	+1.9

川崎と全体の平均正答率を比較すると、本市の各教科、各学年は、国語、数学、英語の3学年と、社会、理科の中3において、全体より0.3から4.9ポイント上回っています。

平均正答率は、中1、中2の社会、理科以外すべての学年、教科で参加自治体全体を回っている。

R7	国語 平均正答率			社会 平均正答率			数学 平均正答率			理科 平均正答率			英語 平均正答率		
	川崎	全体	差	川崎	全体	差	川崎	全体	差	川崎	全体	差	川崎	全体	差
中1	64.9	64.6	+0.3	43.7	44.9	-1.2	63.6	62.8	+0.8	61.8	64.0	-2.2	91.0	90.3	+0.7
中2	74.5	73.4	+1.1	52.3	52.8	-0.5	61.0	57.7	+3.3	54.9	56.4	-1.5	62.6	57.7	+4.9
中3	66.6	65.8	+0.8	54.7	54.3	+0.4	66.6	54.7	+2.9	55.8	54.7	+1.1	63.2	59.0	+4.2

○同一母集団の経年比較(令和5年度から令和7年度)

中学校 5教科平均正答率

	川崎と全体の平均正答率の差		
	R5 中1	R6 中1	R7 中1
中3	+1.9		
中2	+1.5	+1.5	
中1	-1.1	-0.1	-0.3

川崎と全体の平均正答率の差を見ると、令和5年度の中1は全体より1.1ポイント下回っていたのが令和7年度には1.9ポイント上回っています。

全体との差について同一母集団の経年変化を見ると、学年が上がるにつれて良くなっている。

○4層分析 と C-D層間の差

※「A層」「B層」「C層」「D層」の欄は平均正答率(%)を、
「C-D差」の欄はC層とD層のポイントの差を表しています。

中 国語	川崎市学力層別				
	A層	B層	C層	D層	C-D差
R7・中1	86.4	72.5	59.9	40.9	19.0
R7・中2	94.0	83.5	70.9	49.5	21.4
R6・中1	84.5	70.1	57.4	37.2	20.2
R7・中3	85.7	74.4	63.1	43.2	19.9
R6・中2	89.7	78.1	67.2	47.3	19.9
R5・中1	91.4	79.9	67.6	46.4	21.2

中 社会	川崎市学力層別				
	A層	B層	C層	D層	C-D差
R7・中1	68.9	49.1	35.7	21.1	14.6
R7・中2	77.6	58.7	45.0	27.8	17.2
R6・中1	73.3	54.3	41.9	27.3	14.6
R7・中3	77.5	61.5	48.7	31.1	17.6
R6・中2	78.8	57.7	42.3	24.7	17.6
R5・中1	76.9	58.5	45.8	29.7	16.1

中 数学	川崎市学力層別				
	A層	B層	C層	D層	C-D差
R7・中1	89.2	74.8	58.9	31.4	27.5
R7・中2	91.0	72.9	54.0	26.2	27.8
R6・中1	91.0	77.8	61.4	33.0	27.4
R7・中3	88.1	70.4	49.4	22.6	26.8
R6・中2	84.1	63.6	45.1	21.2	23.9
R5・中1	91.5	78.0	63.0	36.9	26.1

中 理科	川崎市学力層別				
	A層	B層	C層	D層	C-D差
R7・中1	88.9	71.6	54.6	32.2	22.4
R7・中2	78.7	61.4	48.2	31.2	17.0
R6・中1	82.2	66.1	52.4	31.8	20.6
R7・中3	85.0	65.5	46.3	26.5	19.8
R6・中2	72.6	53.1	40.5	25.4	15.1
R5・中1	83.6	68.7	55.6	35.7	19.9

○4層分析 と C-D層間の差

※「A層」「B層」「C層」「D層」の欄は平均正答率(%)を、「C-D差」の欄はC層とD層のポイントの差を表しています。

中 英語	川崎市学力層別				
	A層	B層	C層	D層	C-D差
R7・中1	100.0	95.2	91.5	75.9	15.6
R7・中2	92.5	73.8	52.7	31.2	21.5
R6・中1	100.0	95.2	90.3	71.5	18.8
R7・中3	94.5	77.8	53.3	27.5	25.8
R6・中2	90.6	69.5	46.6	26.2	20.4
R5・中1	91.8	81.4	72.6	56.0	16.6

5教科 平均	川崎市学力層別				
	A層	B層	C層	D層	C-D差
R7・中1	86.7	72.6	60.1	40.3	19.8
R7・中2	86.8	70.1	54.2	33.2	21.0
R6・中1	86.2	72.7	60.7	40.2	20.5
R7・中3	87.0	70.6	52.8	31.9	20.9
R6・中2	83.2	64.4	48.3	29.0	19.3
R5・中1	87.0	73.3	60.9	40.9	20.0

層間の差 16.4 17.8 20.9

※令和7年度の中3は、A-B層間が16.4ポイント、B-C層間が17.8ポイントで、C-D層間の20.9ポイントが一番大きく開いている。

他の層間よりもC-D層間が大きく開いている。

【中学校の調査結果全体について】

各教科、各学年の平均正答率について、川崎と全体との差に着目すると、社会と理科の中1及び中2を除くすべてにおいて全体を上回りました。また、同一母集団の平均正答率を、同様に川崎と全体との差に着目して経年比較すると、今年度の中3は、中1のときには全体を下回る結果だったのが、学年が上がるごとに改善され中3では1.9ポイント上回りました。

4層分析の各層間の差に着目すると、社会の中1及び中2、理科の中2を除くすべての教科と学年において、C-D層の差が最も大きいです。小6の26.6ポイントと比べて差は小さいものの、引き続き、学習の際の疑問や関心について確認し、問題を解決していく授業の展開を行っていくことが大切です。

第2章 II 2 中学校 国語科

1年生

知識・技能の分析と授業づくりのアイデア例

【知識・技能】

全体の正答率は68.8%でした。特に次にあげる問題2(2)ウの正答率は次のようになっており、パターン判定はIでした。A層とB層の差が28.1ポイント離れ、A層とB、C、D層に開きがあることがわかります。漢字の書き取りの分野が苦手であると考察できます。

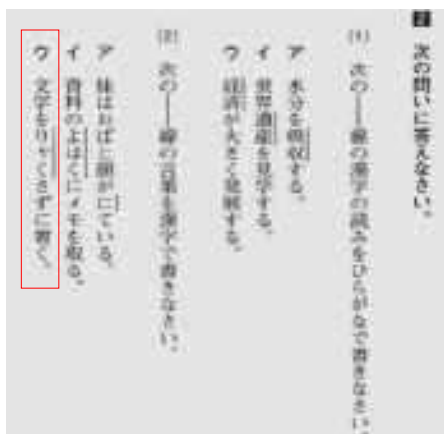
年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	68.8	89.5	77.0	64.4	44.2	45.3

【問題2(2)ウの正答率】

このような結果となる要因として、語彙力の低下が挙げられます。このことについて授業づくりのアイデア例を右側に掲載します。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	46.3	85.8	57.7	33.7	7.9	77.9

【正答】
略



【授業づくりのアイデア例】

①授業の冒頭で文章を読む活動を取り入れる

例えば、新聞に掲載されている社説等を読む活動を取り入れることで、様々な言葉を目にすることができます。その中で、読めない漢字は、辞書を使って調べることで、語彙力が定着すると思います。また、その調べた言葉、意味やその言葉を用いた短文を書き留めるワークシート(スプレッドシート)などを作ることで、自分オリジナルのノートができ上がり、あとからでも見返すことが可能になります。言葉の蓄積が視覚的にわかるメリットもあります。

②他教科等の学習や日常の会話の中でも漢字の書きについて意識させる

「話すこと・聞くこと」の活動でも言葉(=漢字)を知らないと誤った表現をしてしまうことが考えられます。そこで、会話を文字に起こす活動を取り入れることも効果的であると考えます。漢字の指導を怠ると、読解力の低下につながり、他教科への影響も懸念されます。漢字を習得することで、思考力、表現力、創造力が豊かになることを実感させ、生徒が「漢字を勉強した方がよい」と思えるような指導の継続が必要です。

思考・判断・表現の分析と授業づくりのアイデア例

【思考・判断・表現】

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	62.1	84.1	69.1	56.5	38.5	45.6

全体の正答率は62.1%でA-D層の差は45.6ポイントでした。特に、次にあげる問題1(5)の正答率は次の通りとなっており、D層においても正答にたどり着くことができない生徒が多くいました。

【問題1(5)の正答率】

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中1	65.3	87.8	74.9	60.5	37.9	49.9

このような結果となる要因として相手の伝えたい内容を捉える力が弱いことが挙げられます。このことについて授業づくりのアイデア例を右側に掲載します。

【正答】

2



【授業づくりのアイデア例】

話し手の意図や情報を整理しながら的確に捉える

短いスピーチを、その都度メモを取りながら聞く時間を設定します。メモをもとに聞き取った要点をグループで共有し、内容の整理や再構成を行います。その後、同じ話を再度聞いたり、話し手にインタビューをしたりするのも効果的だと考えます。話し手の意図や情報を整理しながら的確に捉える力を身に付けるようにします。

文章全体の要旨を正確に捉える

相手の伝えたいことを正しく聞き取るためには、内容を読み取る力も必要です。

例えば、説明文では、段落ごとに筆者の主張や中心となる文を読み取ります。また、それらを組み合わせて文章全体の要旨を考えます。段落ごとの読み取りを通して、文章全体の要旨や筆者の主張を正確に捉えることにつながります。

新聞の記事を読み取ることも応用として考えられます。

2年生

知識・技能の分析と授業づくりのアイデア例

【知識・技能】

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中2	84.6	97.1	91.8	83.7	65.5	31.6

全体の正答率は84.6%で A-D層の差が31.6ポイントでした。特に次にあげる問題5(1)は次の通りとなっており、A-D層の差が79.9ポイント、パターン判定はⅡでした。

【問題5(1)の正答率】

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・中2	57.7	94.4	77.1	44.9	14.5	79.9

この結果から、C、D層の生徒は言葉の知識・理解の定着ができていないことが考えられます。このことについて授業づくりのアイデア例を右側に掲載します。

【正答】

1



【授業づくりのアイデア例】

①整理・分類して定着を図る

生徒が主体的に取り組み、語句の量を増やしその知識を確実に定着させていくには、GIGA端末を使用したグループ学習も効果的だと考えられます。文学的文章の学習など、個人の意見から考えを広げていくための思考ツールとして「FigJam」を使います。自分の考えをもとに他者と協働してボードに書き込んだり、グルーピングしたりすることで、物事を多面的・多角的に見る力の育成が期待できます。

②正しく理解して適切に表す

語感を磨き、語彙を豊かにするためには、習得した知識を社会生活の中で使える力が必要です。同じ意味でも表現の違いを取り上げたり、言葉から受ける印象を問いかけたりすると意味・用法の微妙な違いを意識できます。また、短い時間を使ってスピーチをするのもよいでしょう。他者に自分の思いを伝えるためには、どの言葉を使うのが効果的かを考えることで得た知識をアウトプットすることができます。